

# 地域住民の参加による「育樹間伐」の実施について

諏訪・間伐促進プロジェクトチーム 経理課 処分係 唐 木 和 衛

## 要 旨

カラマツの間伐は材価が安く採算がとれないため、間伐は進まず健全な森林の育成ができない。しかし地域住民の中には、家庭環境の整備、農作業の資材として小径木を必要とする人が多いが、販売所が少なく、かつ高価のため入手が困難な状況にある。そこで余暇等の自家労力を活用して「大根と同じ値段で間伐木が手に入る」をキャッチフレーズに地域住民に呼びかけ、それにより間伐の促進と山造りの資金確保を図ることにした。実行結果は本数 2,169 本、176,050 円、参加延人員 186 人で予想以上の販売が出来た。

## はじめに

長びく不況と外材依存が続く林業界は、引続く木材需要の停滞で、今や危機と言われている。一方戦後植林したカラマツ人工林は、最後の手入れである間伐期を迎えている。しかし最近の木材価格は低迷しており、特にカラマツの間伐木は材価が安いいため、採算割れとなっている。

当署においても人工林 5,100haのうち、カラマツは68%の 3,400haを占め、間伐適期のⅣ～Ⅵ齢級の林地が 1,600haで47%と約半数を占めている。

地元業者、森林組合へ無理に依頼しても、年平均約25haがせいぜいで、手入れが遅れている。

一方地域の農家では、農業用資材であるはずの棒、牧柵等に、また一般家庭でも、垣根の杭、庭木の支柱などに小径木をほしがっているが、価格の問題や、販売店が近くにないことなど、入手することが困難な状況にあることに着目した。

林業者はよい山を造りたい、間伐をしたい、山に入って木を伐ってもらいたいが、いろいろの規制があって山に入れないと嘆いている。

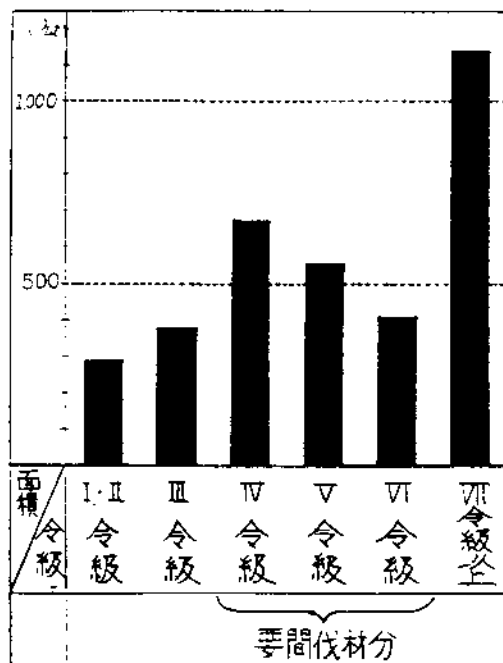


図-1 カラマツ齢級階別面積

そこでいろいろの手続きや資格はいらない、自由に山に入り、自分の好みに合ったものを、ほしいだけ伐っていただく、余暇の活用による間伐の促進ということで、育樹間伐を試みた。

山を育てるには50年、100年といった長い年月がかかり、我が子を育てるような愛情が必要で地域の人々に理解され親しまれてこそ、山は守られ育つものである。地域の人々の力を借りて山造りを行う一つの試みとして、育樹間伐の意義を見出そうとするものである。

## I 実施要領

### 1. 間伐木の定価販売の是非

署で検討すると共に、営林局、林野庁へ資料を提出し検討を依頼した。その結果、会計法第29条の3・4項、予決令第102条の4・4号のロの有利随契を適用した。

会計事務は「樹苗を即売の方法により売払う場合の経理事務について」の長官通達を運用した。

### 2. 販売価格の決定

誰でも買いやすい価格はどの位か検討した結果、大根一本と同じ位の価格ではどうかと考えた。そこで林道から約50mの搬出しやすい範囲では一本100円、それより遠いところでは50円と決めた。

(参考)

従来の不採算林分のカラマツ間伐材は1㎡、約100円で1㎡当りの本数は約20本であるので1本約5円となる。

### 3. PRについて

余暇を利用して「大根より安い1本50円、100円でカラマツ間伐材を使ってみませんか」というキャッチフレーズで、営林局署の広報紙、新聞、テレビ、市町村広報紙、有線放送、回覧板等と別荘地、ペンション、農家などへは各戸へ職員の手により、手造りのチラシを配布した。

その内容は

(1) 南信日日新聞(諏訪地方紙)と林業経済新聞へ記事として掲載

(2) 有線放送で茅野市金沢地区と富士見町で放送

(3) ながの庁報へ掲載

(4) チラシ配布

茅野担当区部内 1,000部、富士見担当区部内 950部、諏訪市外 250部、

合計 2,200部

(5) 電話での呼びかけ

以上のようなPRをしたところ、これ以外の新聞でも随時とりあげてくれた。全国的にも、朝日新聞が創刊100周年を記念して設立したと森文化協会の機関紙グリーンパワーと、スリーMマガジンにも掲載されPRが出来た。又、テレビではテレビ信州、信越テレビで現地の伐採、搬出などの模様が放映された。

以上のような新聞、テレビ等の報道により国有林に対する認識を新たにしてもらおうと共に、身近かな国有林のPRができた。

## II 実施上の手順

### 1. 実施場所

富士見担当区部内 西岳国有林、茅野担当区部内 金沢山国有林で約800本、1.2haを設定した。

2. 収獲調査

- (1) 区域をビニールテープで表示（林道から50mと 100m）
- (2) 対象木 胸高直径，6～12cm，胸高部，ビニールテープとナンバーテープの偶数，根際，ナンバーテープの奇数
- (3) 調査上の留意事項
  - ア．接近作業を避けるため可能な限り列状間伐とする。
  - イ．傾斜木，枯損木等は事前処理，つる等のからまっている木は避ける。
  - ウ．急傾斜地，石礫地等の危険な場所の選木は避ける。

3. 実施日

第1回目，7月第3，4週と8月第1週の土，日曜日 延6日間  
 第2回目，9月，10月の平日を含む土，日曜日 延21日間

4. 伐倒，搬出

- (1) 各担当事務所へ10時に集合，案内し，現地で署員が実行前に，口頭で伐採方法の説明と安全指導をする。

伐採方法の説明は，ア．伐採箇所 黄色テープの区域内。イ．対象木 伐倒する際胸高部のナンバーテープを取って保官根際のナンバーテープは残して伐倒すること。

安全指導は，ア．接近作業とならないよう10m以上離れて作業すること。

- イ．原則としてチェーンソーは使用しないこと。
- ウ．強風，大雨，濃霧等悪天候時は作業を中止することがある。
- エ．保安帽を着用すること。
- オ．たき火，タバコのすいがら等，火気には十分注意すること。
- カ．伐倒，搬出，運搬中の事故は，買受人の責務として，当署では責任は負わないので十分注意すること。

- (2) 本数の確認，代金領収

買受人は伐倒，搬出した間伐木のナンバーテープを，担当区主任等の出納員に提示し，検収を受け代金を納付する。出納員は代金を収納し，売上票，お買上票を作成し，領収印を押しし交付する。

Ⅲ 実行結果

- 1. 販売結果は表-1のとおり

表-1 販売結果

場 所	数 量		面積 (ha)	販売額 (円)	参 加 者	
	本数 (本)	材積 (m <sup>3</sup> )			組	延人員
西岳国有林	1,752	73	2.50	143,700	40	129
金沢山国有林	417	14	0.60	32,350	27	57
計	2,169	87	3.10	176,050	67	186

## 2. 地域別参加者数は図-2のとおり

地域別にみると、地元の茅野市、富士見町が多く50組となっている。

## 3. 利用目的別、本数及び参加組数は図-3のとおり

土木工事用が本数では群を抜いて多いが参加組数では比較的少なく、大口の需要者がいた。農業用としては、はぜ棒が本数、組数ともに一番多く、リンゴの支柱、菊支柱が続き、また、その他では、のぼり竿、土手の階段用、藤棚などの利用もあった。

## 4. 参加者の意見と要望

(1) 第1回目は、実施時期が菊、野菜の出荷期と重なり参加できなかった。又、土、日曜日であったので平日も設定してほしい。

(2) 10時集合では、実働時間が少ない。

(3) 伐倒と運搬の日を別でもよいというわけにはいかないか。

(4) 間伐木はほしいが車がない、営林署で運搬してもらうわけにはいかないか。

(5) もっと大きな間伐木をほしがる人も多かった。

(6) 営林署の職員が、伐倒など手伝ってくれて、大変ありがたかった。

(7) 作業をやってみて、林業の大変なことを理解した。

## 5. 担当者の意見

### ○ PRについて

(1) チラシ配布は実施前20日位がよい。

(2) チラシの中に具体的に用途例を書いてはどうか。

(3) 利用された状態を写真に撮り、新聞社などに提供したらどうか。

(4) 直接の戸別配布が効果がある。

### ○ 実施について

(1) 署員が手伝ってやって、やっと伐倒、搬出できるものが大勢いた。

(2) あぶなくて見てられない者もあり、指導をしながら、自然に手を出してしまう。

(3) ナタの使用については特に気がつかった。

(4) 安全作業について良く説明したので、ケガが一件もなく良かった。

## IV 考 察

### 1. 育樹間伐による成果

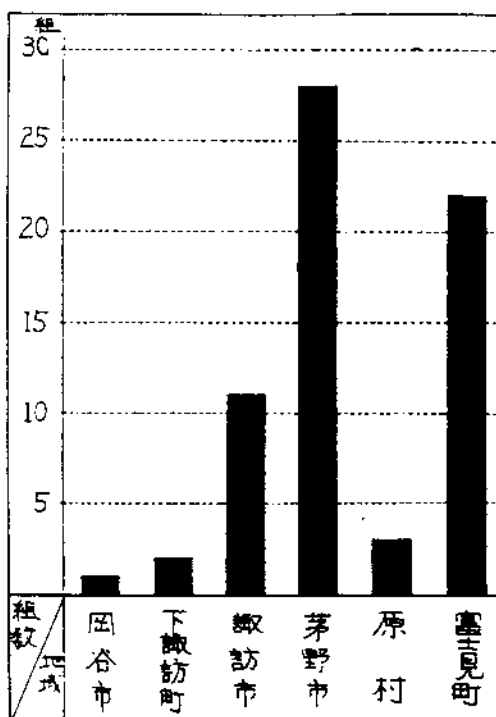


図-2 地域別参加者数

- (1) めんどろな手続きが省け、希望者が自由にに入れて利用できる。
- (2) 当初 800本の計画に対して、2,169本の販売で、予想以上の成果が上った。
- (3) テレビ、新聞で国有林職員の真剣な姿を伝えてくれ、国有林に対する理解が得られると共に、地域の人達との結びつきが出来た。
- (4) 林業の苦勞がわかり、間伐の必要性が理解された。
- (5) 土木用資材としても利用され、土木建設業者にも、買受け希望があった。

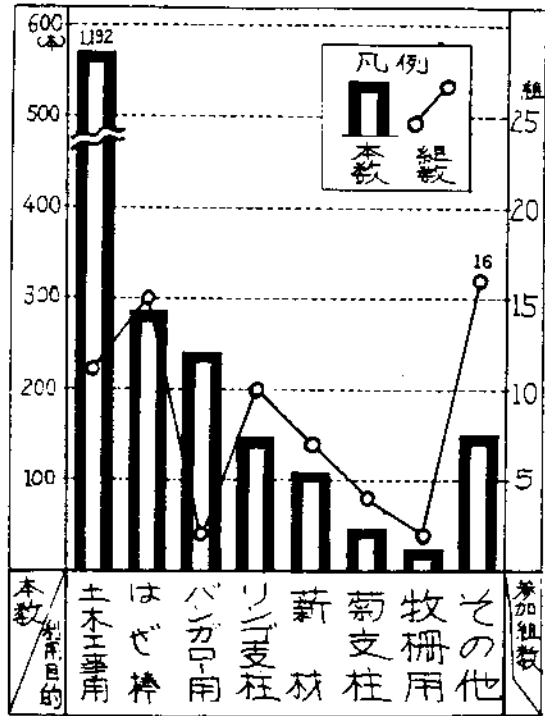


図-3 利用目的別本数及び参加組数

## 2. 問題点

- (1) 農繁期と重なり、希望があっても参加できない人が大勢いた。
- (2) 素人が伐倒、搬出するので、特に安全に配慮する必要がある。
- (3) 林道の近くの伐倒は進むが、遠い所は残る傾向にある。
- (4) 希望があっても、車がなければ参加できない。

## 3. 今後へ向けての検討事項

- (1) 新聞、有線放送、市町村広報紙等により、国有林への理解と育樹間伐を随時PRする。
- (2) 日時にとらわれない方法での販売。
- (3) 間伐の意義を損わない限り、希望に応じた太さの物も売払い、拡大を図る。
- (4) 地域の人々の協力による山造りと開かれた国有林を日差す。

## おわりに

全国でも初めての試みの、即売による間伐は予想以上の成果を上げた。今回は始めてでもあり、日時を設定し、署員が立合い、現地指導を行ったが、今後に向けては住民はいつでも自由に入山し、伐倒し、帰りに担当区事務所へ寄って現金を支払うシステムなど、人手を少なくする方法で定着を図りたい。地域住民との信頼関係が、ひいては当署の重点方針である「地域に愛される国有林づくり」の一

端を担うことになる。冒頭に記したように、カラマツ間伐の停滞は林業界の大きな問題となっている。育樹間伐で、できる間伐は僅かであるが、地域の人々、特に林業と関係のない人々が山に入り、たとえ一本でも木を伐る機会をもってもらったこと、また木を使ってもらうことで国有林を知ってもらい、林業の苦勞をわかってもらうとともに、ひいては森林は一朝一夕ではできないことを理解してもらうことができたことなど、大きな効果があったと考える。

なお、間伐促進プロジェクトチームの編成員は次のとおりである。

署 長 畑中静雄

次 長 小竹聡男、（前、田中豊）

庶務課 柴田 一、丸山林兵、江原和夫

経理課 小林由治、唐木和衛、唐沢降夫、丸山 登

経営課 三石昭一、松原 敬、前田貞治、島崎春雄、元島清人、伊藤邦夫、小平三郎

事業課 畑 憲祐、三尾幸雄

茅野担当区事務所 大平哲夫、森 孝之

富士見担当区事務所 唐木 渡、柳沢元雄